

紙芝居

北前船と美川の繁栄——



二代熊田源太郎「わたしは紙魚になりたい」

(前説) 江戸時代、蝦夷地といわれた北海道から日本海沿岸、瀬戸内を経て大坂へ多くの弁財船が行き来していました。船は港々で商いを繰り返えし、ひと航海で千両も儲けたそうです。この和船を大坂の人々は「北前船」と呼んでいました。北前船は江戸時代の流通経済を大きく担っていました。北前船が運ぶニシンの魚肥は、大坂周辺の綿花や菜種の肥料に使われ生産を高めたそうです。松任でも藍や菜種の生産に役立っていました。民謡追分節を始め医学など上方の文化の伝播や寄港地の経済的発展は、今も文化遺産として伝えられています。明治になると、船主達は学校設置の資金や奨学金の提供など人材の育成に惜しみなく援助します。湊小学校も船主らが献金したそうです。彼らは千両箱を日常扱う海の豪商でした。明治に入り西洋型帆船や汽船を使って大きな商いをを行い、保険・銀行・製鉄・造船・発電・運送倉庫・鉄道・水産業など近代産業を興しています。

この物語の主人公二代熊田源太郎(源一郎)も北前船船主の一人です。手取川河口に開かれた本吉湊は古くから知られる豊かな町でした。対岸の湊村も江戸後期、家数約 280 軒の内 200 軒は船持ち・船稼ぎをする町になっていました。主な船主に魚屋八郎右衛門、熊田八郎兵衛、畑屋市右衛門、橋本屋五郎右衛門、鹿島屋長三郎らがいました。

源一郎は赤ん坊のとき初代熊田源太郎家に養子に迎えられます。明治 36 年(1903) 12 月養父源太郎が急死、源一郎は旧制小松中学 5 年生でした。卒業まであと 2 カ月余りでしたが、養母の願いを聞き入れて中学校を中退し、熊田家当主に就き源太郎を名乗ります。熊田家の事業の整理と地域産業の創業などに多忙を極めますが、勉強への思いは捨てがたく、多くの書物を手に入れ暇を惜しんで読み耽ります。桁違いの高価な沢山の本は「呉竹文庫」として一般に公開し、奨学金を提供するなど青少年教育に貢献します。

(主要登場人物) 二代熊田源太郎(幼名源一郎) / 明治 19 年(1886) 8 月 9 日生まれ、昭和 10 年(1935) 1 月 12 日歿。享年 48 歳。湊村北前船船主。多くの地方企業、銀行などを創業し、地域経済と青少年の教育に貢献。地方の名士となる。私設図書館「呉竹文庫」を開設し一般公開する

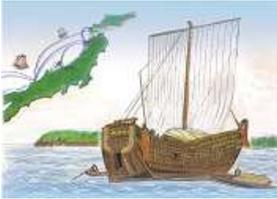
源太郎夫人みち / 橋立北前船大船主十一代西出孫左エ門の次女。源太郎より 2 歳年下  
養父母初代源太郎と志ん / 天保生まれの養父母。初代源太郎は北前船船主として大きく商いする。しっかりものの刀自(主婦)「志ん」は熊田家を取り仕切る

西出朝風 / 孫左エ門の兄の長男、明治 17 年生、みちの従兄。歌人、慶応大学中退

竹久夢二 / 明治 17 年生、早稲田大学に学ぶ。詩人・画家

西出孫左エ門 / 橋立北前船船主西出家十一代目。教育事業に献金。全国的に活躍し多くの近代産業を興す

## F-1 湊村



能美郡湊村は、江戸時代後期には家数約 300 戸の大きな村でしたが、そのうちの 200 軒以上の家は船主や船頭、船員などの船で生きる人々でした。耕す田畑もなく、ほとんど農民のいない村でした。

しかし村の船主が持つ船は数十隻におよんでいました。一枚帆の弁財船といわれる和船で、遠く蝦夷地（北海道）から日本海や瀬戸内の港々で商品を売り買いし大坂へ航海していました。

大坂の人々はこの船を北前船と呼んでいました。

船頭の才覚（才能）によっては、ひと航海千両も儲けが出たそうです。このような船頭や船主が沢山いた湊村はとても豊かな村だったのです。お話しする熊田家もそのような北前船の船主のひとりでした。

## F-2 初代源太郎



天保生まれの初代熊田源太郎は、明治に入ると弁財船数隻を父からゆずり受け北前船船主になります。廻船業熊田家の当主になったのです。源太郎の六つ年下の妻「志ん」がしっかりもので熊田家を内から支えていました。安心した源太郎は高価な西洋型帆船を次々と購入し商いを盛んにしてゆきます。西洋型帆船は一年で何度も航海することができ、熊田家持ち船の弁財船の2倍ほどの大きさでしたから和船の数倍も荷物を運ぶことができました。明治政府が後押しする大船主と直接争わないように、商品の仕入れや商売する港を選び抜いて大いに利益を上げました。

初代源太郎は得た利益で石川郡や能美郡の土地を買い占めてゆきます。気がつけば、加賀の大地主になっていました。

明治20年頃、好景気を見越して能美郡の大谷鉦山を購入したのもこの頃です。鉦山主熊田家の誕生です。

## F-3 養子



志ん

仲睦まじい夫婦でしたが、初代源太郎とその妻志んとの間には子どもがいませんでした。源太郎が50歳を越えたころ、養子をもろうことになりました。

「ははじゃや、おお笑っておる。利発な顔をしているのう。立派な一人前の商人になるようこの養母が仕込んでやりましよう、のう」

志んは、産着にくるまれた赤子の顔をのぞきこんで話し掛けま

す。家内を取り仕切ることも子供のしつけもしっかりものの源太郎の妻の仕事でした。

初代源太郎

「しかと、頼んだぞ。ひとかどの海の男の頭領とうりょうになるんじゃ」  
源太郎は船乗りの太い腕で小さな赤ん坊を抱き上げ、うれしそうに言います。熊田家にやって来た男の子の赤ん坊は源一郎と名付けられました。

早いもので源一郎は成績も優秀で、高等小学校も最終学年になっていました。

#### F-4 中学入学



初代源太郎

明治30年(1897)、小松の町に県立中学校(旧制小松中学)が開校されることになりました。

「源一郎、来年春小松に新しくできる中学校へ入学するのじゃ」  
新しい知識を身に着け、息子が一人前の商人あきんどになることを源太郎は楽しみにしていました。

源一郎

「はい、父さま、源一郎はしっかりと勉学に励みます」

源一郎は内心とても嬉しかったのは言うまでもありません。中学校へ進学できる喜びと同時に、好きな文学の本を沢山読めるという秘かな期待に胸を膨らませていました。

初代源太郎

「そうじゃ、祝いに自転車を買ってやろう。舶来品はくらいひんやぞ、大阪からうちの船に載せて運んでくるよう手配しよう」  
届いた自転車は木製リム(車輪)で軽く、源一郎はすぐに乗りこなし、自転車通学します。

月日は流れ源一郎は中学5年生、17才になっていました。

源一郎は源氏物語や古今和歌集を愛読し、自らも短歌を詠むようになります。文芸誌である『新声』や『明星』に夢中になるのもこの頃です。新しい短歌は源一郎の心を捉え文芸誌へ作品を投稿するようになり、学校生活を描いた私小説「土筆」を創作します。すっかり文学少年になっていました。

#### F-5 養父の急死



商人として才覚(才能)があった初代熊田源太郎は西洋型帆船3隻を使い莫大な利益を上げ、熊田家は屈指の船主になっていました。新しく敷設された鉄道にも目を付けていました。

明治36年(1903)12月半ば、養父の熊田源太郎(68歳)が突然亡くなります。葬儀も済ませて間もなく、源一郎は養母に呼

養母志ん  
源一郎

ばれます。

「源一郎殿、お前いくつになりましたか」

「はい、満で17歳になりました。年が明けると中学校を卒業します」

すでに年の暮れでしたので、学校は休みに入っていました。

志ん

「熊田家の当主は源一郎殿が継いでもらわねばなりません。いまは大変困難な時節です。熊田の船は今日も海を走っているのです。商いは待ってくれませぬ。明日より熊田家を継ぎ、源太郎を名乗りなさい。学校へは養母が退学届けをだしましたから」熊田家を仕切る養母には逆らえませぬ。卒業さえすれば進学は何とでもなると思っていました、養母にはお見透しでした。翌春の3月、小松中学校第一期生の卒業写真に源一郎の姿はありませんでした。

## F-6 みちと結婚



二代目源太郎が当主となって間もない明治37年(1904)2月、日本とロシアの間で戦争が始まります。日本海を帆走する北前船が積み荷を奪われたり、沈められて北陸の船乗りにも犠牲がでます。

翌明治38年(1905)9月平和になって、安心して船を動かすことができるようになりました。

うれしいことは続きます。お正月が明けると、源太郎は橋立村北前船大船主西出孫左エ門家からお嫁さんをもらうことになりました。孫左衛門の次女、名前をみちといい、源太郎より二つ歳下でした。

源太郎は、みちを一目見て気に入り生涯を共にすることを心から喜びました。

## F-7 事業の整理



戦後不況になって景気が悪くなっていました。源太郎は採算が取れなくなった大谷鉱山を尾小屋鉱山へ売ることになりました。鉄道の開通によって経済は大きく変わっていました。源太郎は買い積して商いする北前船の商売を改め、輸送に力を入れ運賃に利益を見いだします。本格的な運送業の開始です。大陸や樺太航路へも人や物を運ぶようになります。樺太沖には熊田家の漁場を拓き、獲った魚介類を各地へ運び利益を上げます。さらに北海道や九州の石炭、新潟からは石油を大阪方面への積荷としました。熊田家の特色は大手海運会社が寄港する大阪港を避け、

広島県の鞆の浦（鞆港）や古くから寺内町で経済活動が盛んな貝塚で商いしていたことです。何よりも西洋型帆船3隻が大いに働いてくれました。

二代源太郎「ニシン粕の肥料は、富山の伏木港に陸揚げして鉄道で松任、小松に運ぶのが好い」と源太郎は番頭に命じます。

鉄道輸送の利用によって広大な熊田家の田畑へ肥料を隈なく運び込むことができるようになりました。小松駅前には商品を販売する拠点、熊田商事部が開店していました。

#### F-8 地主と小作



加賀の大地主であった熊田家では北海道にも土地を購入し、牧場開拓を始めます。120町歩の開拓地に15家族の小作を募集し入植させていました。

北海道のニシン粕の肥料を大量に運び熊田家の田畑に投入していた効果が上がり、小作の人たちと品種改良を試みます。自然災害が多かった頃ですが、源太郎は品評会を主宰し作物の品種改良の成果を上げた農民を表彰して支援しました。こうして熊田家の耕作地の収穫は確実に上がってゆきました。

土地所有を希望する熊田家の小作の人には分割払いで土地を譲り自作農を育てます。加賀でも北海道でも熊田家の小作の人々は、耕作や開拓に一層励み汗を流しました。

恵まれた環境を当たり前とせず、社会の道理に合わないことから目をそらさない正義感あふれる熊田源太郎の姿でした。

#### F-9 呉竹文庫



源太郎はわずかな時間を見つけ、書齋に籠り読書で過ごしました。書棚から出してきた本に銀色の小さな虫が走ることもありました。源太郎はこの虫をすぐに潰さず、愛おしそうに眺めることがありました。

心ならずも中学校を退学した反動でしょうか、沢山の高価な本を購入していました。集めた本は一万数千冊にもなり、書庫に納め「呉竹文庫」と名付けていました。書籍は、国（日本）文学を始め西洋文学、哲学宗教、政治経済、美術など多くの分野に及んでいました。大正4年（1915）「呉竹文庫」を一般に公開します。どんなに忙しくても源太郎は5日に一度は文庫に出かけ、自ら本の整理をしていました。

湊村でも中学校に通う生徒が増えました。源太郎は、彼らを集

め「竹風会」という学生会を作り、事務局を「呉竹文庫」に置きます。読書、絵画、短歌に親しむ会です。流行りのテニスや野球と一緒に汗を流すこともありました。

源太郎は書を読み努力する若者を好んで応援しました。呉竹文庫の閲覧者を集め、自由な演題で年一回発表会を開きます。地元美川や湊の人でしたが女性も参加する進歩的な会でした。

#### F-10 地方の名士



実業家源太郎は社会の流れを見極め、矢継ぎ早に経営する事業の会社組織（法人）化、多角化を進めていました。加賀地方に鉄道など多くの企業と銀行を設立し、いつしか中心的な経済人、地方の名士として知られ頼られるようになりました。

大正5年（1916）12月、源太郎を代議士（衆議院議員）に押そうとする人たちが度々熊田家を訪れます。

源太郎が立候補を決意すると「熊田源太郎、起つ」と新聞に掲載されます。さあ大変です。親戚から反対され、妻みちの従兄の西出朝風から自重を求められます。

#### 西出朝風

「源太郎君へ、僕は問う。県民60数万と有権者2万余りとどちらかを選ぶことが君にできようか」と。

とうとう妻の父西出孫左エ門からも忠告され、源太郎は立候補を取りやめます。

#### F-11 夢二と朝風



大正6年夏、みちの従兄、歌人の朝風が遊びに来ました。昨年の選挙騒動以来、急に親しくなっていました。朝風が竹久夢二夫妻と麦わら帽子を被った息子連れ、湊村の熊田家を訪れたのは暑さが残る8月半ば過ぎでした。

源太郎が短歌に親しみ、膨大な量の書を集め「呉竹文庫」を公開していたことから、ぜひ見学したいと立ち寄ったのでした。

源太郎は朝風と文学や短歌について話すのがとても楽しみでした。夢二夫妻、朝風、家族ぐるみで過ごした夏のひと時、源太郎には夢のような時間でした。

この夏、夢二が描いた木造の美川橋の素描画（スケッチ）を「呉竹文庫」に見ることができます。

知識を知る喜びを広く分かちたいと願った源太郎は、大正12年（1923）、湊小学校を会場に夏期大学の開催をします。4泊5日の夏期大学には250名の参加者を集めました。東洋大学教授柳

宗悦<sup>そうえつ</sup>を始め、第一線で活躍していた大学の先生を集める贅沢<sup>ぜいたく</sup>な講師陣でした。

F-12 わたしは紙魚



昭和4年(1929)妻、みちが亡くなります。

辛いことが続きます。昭和9年(1934)手取川大洪水で美川橋が流され、湊村は大きな被害をだします。村人は「復興のために、もう一度村長になってほしい」と源太郎に願います。手術をして間もない身体でしたが願いを聞き入れます。村長に就くと寝食を忘れ復興に取り組みました。年が明けて復興の兆<sup>きざし</sup>が見えてくると病気が再発します。金沢の病院で緊急の手術を受けますが、健康を取り戻すことなく他界します。48歳でした。

源太郎

「今度生まれて来たなら…」

病床の源太郎が、かすかにつぶやきました。

源太郎

「今度生まれて来たなら、わたしは、紙魚<sup>しぎよ</sup>になりたい…」

心ならずも学半<sup>がくなか</sup>ばで断念した源太郎が残した言葉でした。

いまでも呉竹文庫を訪れる人を胸像と共に源太郎の言葉が迎えてくれます。